桜薬会会報

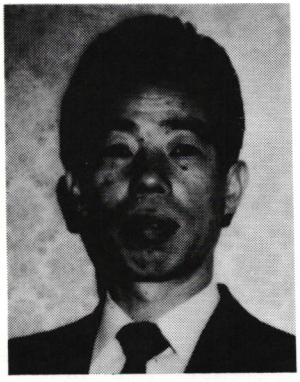
4

目　次

□桜薬会のあゆみ／石田隆夫…2□桜薬会会報に寄せて／滝戸道夫…3□学部昇格についての現況と展望／桐沢誠…4□桜薬会会則改正点／事務局…6□桜薬会会則／事務局…7□会費納入についてのお願い／財務委員会…9□教室だより…10□立山弥七先生退職記念パーティ／分林孝夫…20□卒業20周年記念クラス会／四期生…21□第15回桜薬会厚生省支部会…22□「寄書」親子二代／木下肇…22□「伝言板」石松先生をかこむ会…22／日本大学創立90周年記念事業募金について…22□桜薬会役員名簿…24

「巻頭言」

桜薬会のあゆみ



会長　**石田隆夫**

日本大学理工学部に薬学科が設立されて、早くも¼世紀の歳月が経過し、４千数百人の卒業生が実社会へ巣立って行きました。

桜薬会は４回生卒業の時期、即ち昭和33年末に結成され、明けて34年３月、日本大学工科校友会薬学部会々員名簿発行でその第１歩を歩み出した次第です、その最初の頁に「同窓会に期待して」と題して、新設大学である為の苦労を、「業界に先輩のいないと云う不利は種種の形で現われるのではないでしょうか」と嘆き、「お互に協力し合い、利用し合って活躍する絆に、同窓会がなれば」と願っています。その時工科校友会長は「諸兄の活躍せんとする舞台である全国津々浦々は、又同時にわが工科の有力な校友の活躍舞台でもあり、既に４万人の人々がそれぞれ強固な地盤を築いている、たとえ薬学科の歴史は新しくとも、これら多数の工科校友の存在は薬学諸兄の大きな援助的役割を果す事と思う」と励ましてくれています、主任教授は「薬学部会名簿発刊にあたって」と題して、「我々は諸君とともに薬学部会の伝統を築きあげねばならない、それには諸君の母校に対する追憶が永く消えることなく、又日本大学薬学科の名が常に諸君相互の間を、又我々との間を結ぶ精神的つながりとなることが必要」と教えられておられます、そして父兄会の会長は、薬学部会の発会を祝って「校友の名のもとにスクラムをくみ、実社会に対処してゆく」様にと、喜んでおられました。

その後昭和39年には、名称も「桜薬会」と変更し、会則の改正が行われ、会報の発刊もあって、現在の桜薬会の体面が一応はととのった様です、しかし薬学科設立以来10年程の日時と卒業生全員で千五百余名では、会報に書かれている様に「ようやく業界にもその地歩を占めて来た感があるが、まだ確固たる地歩を築いた、と申すにはやゝ距離がある」時期で「相互の援助と研鑽が必要」と報じています、当時の主任教授も、同窓会の新発足にあたって「今後の活躍が縦横に発展して一層斯学、斯業に寄与貢献すると共に、会員相互の親睦を増す」様にと、挨拶を送られて来ています、この様なひ弱な「桜薬会」も現状ではどうでしょう、卒業生は五千人になんなんとし、同窓諸兄姉の努力もあって、その活躍は薬剤師のあらゆる職域は申すに及ばず、それを逸脱する分野に於ても、そして活動地域は我が国のみならず遠く国外に迄達しています、御同慶の至りであります。

世間の一般的常識から、大学を評価する尺度の一つとして、卒業生が習得しえた専門知識と技術をもって、いかに社会に貢献しているか、更には、後輩の指導と支援が適確になしえているか、があると云われています。

我が多くの同窓の中には、「資格取得のみが目的」と申される無関心派が皆無とは云い難いと思いますが、何と云っても青春の四年間を過したキャンパスであり、種々の思い出がある母校が発展する事を喜ばない卒業生はないでしょう、我々の日常の努力が無意識のうちにも、母校発展に通じている事を心の片隅に留め置く必要があると思います。

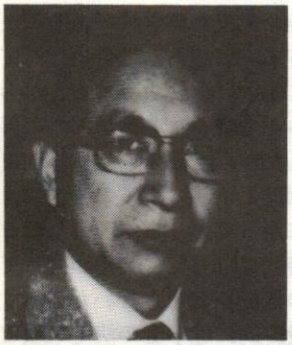
そして「桜薬会」がその中心的存在になれば、と願っておりますが、昭和52年に地域別名簿の発刊という意義ある事業を完成させた以外には、個々同窓諸兄姉の努力に負っているのが現状と云えましょう、しかし昭和54年の総会以来、「桜薬会」には総務、事業、財務の各委員会が生れ、着々と行動を開始しております、選出された委員の方々にもそれぞれの仕事があって、必ずしも会員各位の満足する活動は望まれないかもしれませんが、出来得るかぎり、魅力のある同窓会に育てるべく努力しようと思っております、しかしそれも会員諸兄姉の理解と協力がなければ、いささかの進展を見ないのは自明の理であり

ます。

少々理屈が先走った文になりましたが、言葉で表現すれば簡潔なものでも、文章としてまとめようとすると固苦しいものになりがちです、要は今後の「桜薬会」を役員を含めた全会員で、いついかなる場合も楽しく語り合える場、そんなものにして行こうではありませんか。　（昭和31年卒）

桜薬会会報に寄せて

薬学科主任教授　**滝戸道夫**



昭和31年３月第１回生を世に送った日本大学理工学部薬学科は、此の３月には第25回生を卒業させようとしております。振り返ってみると、この四半世期の間に卒業生即ち桜薬会々員の数は五千人にも及び、それは一大勢力となって薬業界並びに薬学会は勿論のこと、官界をはじめ各界で活躍し、本学科の名声を高めております。此のことは今後の薬学科の発展を思うとき非常に心強く、頼もしい限りでございます。

さて、会報の第２号が昭和41年に出版されてから久しく、この間に薬学科も色々な経験をし、変革をして今日に到りました。昭和43年から45年にかけての日大紛争では、講義も満足に出来ず、教師、学生間に不信の念が深まり、人間としての哀しみをつくづくと感じさせられた苦難の時代でありました。あの暗い、淋しい不安の時を想うとき、今日の学園がすっかり落ち着きをみせ、教師は学生達と心を通わせ、和気藹々とした明るい雰囲気で共に勉学し、研究出来るようになったことを今更ながら喜ばしく思います。

会員の皆々様が学んだ理工学部２号館、その隣りに８号館が出来ました。ここに薬物、生薬、分析、薬剤および香粧品の各研究室が移転し、講義室、学生実験室も併設されて殆んどの授業がこの二つの建物で行われるようになりました。この間に先生方も大分代られ井上周吉、平山清、木村雄四郎、黒柳惣十、立山彌七の先生方が定年退職され、杉井篤先生が熊本大薬学部に、新村宗敏先生が千葉大医学部にそれぞれ転出されました。主任も木村、黒柳、桐沢、里見の各先生に代わり、昨年10月より不肖私が引継いでおります。現在総員約60名で日頃真剣に学生の教育、研究に当っておりますが、この十年来、一部の助手も含めて講師以上の先生方はヨーロッパ、アメリカの大学、研究所、或いは東京大学等に留学、または研修し、また外国の学会にも参加し、研鑽しており、その成果は各種学会や学術論文等に発表されております。これはまた、校友である長谷川稔、高橋周七、椛沢洋三先生が薬学博士となられたことにも表われております。また昨年四月には三回生の徳竹伯夫博士、５回生の長谷川明博士が新任し、やゝマンネリ気味であった薬学科に新風を吹き込み、活気を帯びて来ております。

一方、教育内容も時代の推移により変革し、現在は従来薬学で学んだ科目だけでなく、医学、臨床薬学、薬害問題等を含めた広い知識をもった学生の教育が望まれており、本学においてもカリキュラムを大幅に改正し、社会の需要に応えられる教科内容にしており、近年は臨床検査技師の受験資格を取得出来るための科目も設置しております。

また、校友の関心事である薬剤師国家試験の成績ですが、近年は全国的にその合格率は低下しておりまして本学も必ずしも良好とはいい得ません。然し、最近の本学入学者は相当な素質、実力をもった者であり、特別な講義も設けて懸命に指導しており、年ごとに合格率は向上しており、近い将来優秀な成績を示すものと確信しております。

以上薬学科の現況を簡単に述べましたが、薬学科が理工学部に設立した時代にくらべますと薬学教育は随分と趣を変えて参りました。薬学科が望まれている方向に進み、より発展するためには理工学部から独立し、薬学部を創設し、険しくても独自の新らしい道を切り開いて行かねばならないと考えられます。これが今薬学科教員一同がその実現を一番に望

んでいる課題でございます。幸い加藤渉理工学部長はこれを理解され、自ら進んで薬学部創立を推進されておられ感謝と共に心強く思っております。桜薬会諸兄姉の御理解と御援助によりこの目的を一日も早く達成したく念願しております。

此の度桜薬会々報が再び発刊されますが、これは会員の皆様と共に私達教員の強く望み、心待ちにしておりました事でございます。それはこの会報を通して校友とのコミュニケーションを得たいからでございます。職場での経験から現在の薬業界の動向、必要な知識、望まれる人間像、これからの教育のあり方等々、学校、学生に対する御意見、御叱声を戴きたいからでございます。また大学の現状も理解して戴き校友と学校が一体となって立派な大学にするように自信ある教育をして行きたかったからでございます。是非御投稿下さいまして種々御教示たまわりたく存じます。

最後に会員の皆々様の御多幸と御発展を祈念して挨拶とします。

学部昇格についての現況と展望

理工学部学務担当教授　**桐沢　誠**

桜薬会より標記について執筆依頼がありましたので、御報告いたします。薬学部への昇格は、桜薬会員である校友諸兄姉また在学生諸君も、その実現を望んでおられるものと我々教職員は信じております。

わが薬学科が設立されてから既に30年近い年月が流れておりますが、その間に全国薬系大学は、既設、新設を問わず目覚しい充実発展を遂げております。これらと比較いたしますと、わが薬学科の現状は誠に憂慮すべき状態と云わざるをえません。何んとか現状を打破して、今後例えば、薬学への進学希望者が減少するような事態になっても、その中で堂々と存在してゆける薬学に迄、向上しなければならないと我々は考えております。その為には先ず第一段階として薬学部への昇格を実現し、それを契機に他私大並の校舎面積を確保し、その上で教職員の充実を計って薬学教育を効率的に実施し、同時に大学院を併置するようにしなければなりません。我が国の薬学教育機関の現況から見ても、又日本大学の規模から考えても、薬学は当然部であるべきであります。現状の薬学科では、対外的に日本大学の評価に負に働く因子になりましょうし、また薬学科であることは、在学生卒業生にとって、部である場合に比して不利な点があると考えます。以上のようなことから、我々教職員は兼ねてからその時々に、薬学部への昇格を要望してまいりましたが、学部の独立採算制に基盤を置く大学本部また理工学部の諸般の事情により、実現されずに今日に至っております。併しここ数年加藤理工学部長の時代になって、展望が開けてまいりましたので、その状況をお知らせいたします。

薬学部への昇格は、最終的に理事会の決定事項であることは申す迄もありませんが、複雑な日本大学の事情を考慮しますと、薬学科としては、先ず所属する理工学部長の理解を得、学部長に総べてをお願いする形で、実現を計るのが最良の方策であろうと私は考えております。黒柳先生の跡をうけて教室主任になった私の最初の部昇格への願いは拒否されましたが、半年後の昭和50年11月、加藤学部長は、松代、関両次長、黒柳名誉教授立合いの下に、薬学部への昇格を認めようと始めて言明されました。これを受けて、薬学科では、昭和51年３月、全専任教職員連署の請願書を学部長宛に提出、学部長からは５月21日付で、鈴木総長宛に「理工学部薬学科の薬学部への昇格について」の内申が行なわれましたが、これはある事情でその儘立消えになって了いました。この後、昭和52年度は、海洋建築工学科、航空宇宙工学科、電子工学科３学科の昭和53年度発足に対し、文部省設置規準を充足する為に必要な校地取得の件、また習志野校舎施設の整備に拘る問題への対応で学部は精一杯の状態であり、後者は昭和54年度迄尾を

引くことになりました。このような難問をかかえた中で、昭和53年4月には、理工学部内薬学部設立検討委員会が発足いたしましたが、その活動は停滞気味でありました。そこで、薬学科は昨年3月再び全専任連署の請願書を学部長宛に提出いたしました。学部長は薬学の件が後廻しになっていることを気にしておられましたので、4月20日付で再度昇格についての内申を総長宛に提出して下さり、更に6月には理工学部内に薬学部校舎構想設計委員会、薬学部昇格実行検討委員会を設置されました。後者は薬学科教授だけで構成される委員会なので、7回程開催して、部の構想を練っております。前述の通り4月には学部長から再度の内申が出されましたが、当時本部は日本大学90周年記念行事、その他で多忙を極めておりましたので片付く迄は無理との学部長の判断で、一段落した頃合いを見計らい　11月20日付で、学部長から総長宛に3度目の内申が行なわれました。これが実を結んで、理事会承認の臨時委員会として本部に薬学部設置検討委員会（委員長柴田副理事長、副委員長加藤副総長、高梨国際関係学部長、委員常務理事4名、学部長11名、本部部長4名、理工学部関係5名計24名、幹事本部課長など7名、総計34名。理工学部関係5名中に薬学科からは理工学務担当の私と、ＯＢ教職員代表の山内助教授の2名。）が設置され、第1回委員会が本年1月25日に開催されました。この委員会には鈴木総長も出席して挨拶を述べられ、委員会は柴田委員長、加藤副委員長の舵取りで順調に進み、近々下部組織として小委員会が設置される予定です。

以上現在迄の状況でお判りいたゞけるように、理工学部また本部の事情に左右されますので、なかなか簡単にはまいりませんが、御理解のある鈴木総長、柴田副理事長、加藤副総長兼理工学部長始め諸先生方の御尽力を得て、薬学部への昇格を是非実現いたしたいものです。昭和51年頃から5年先には薬学部を発足させようと考え、4年たった現在、まだ5年先には是非薬学部をつくらなければと考えている訳ですから、部の設置へ近付いたと言えるのかどうか疑問もあります。しかし本部に委員会が出来たことで、今度こそ愈々具体化して行くものと私は希望を持っております。何年度に薬学部を設置すると本部が決定する時には、薬学科にとっては殆んど時間の余裕のない状態になる訳で、その前に薬学科として、陣容を整えるなど、しておかなければならないことが一杯あります。我々は昭和55年度から部の実現に向って積極的に動いて行く所存であります。この件について、校友諸兄姉の絶大な御理解と御援助を仰ぎたく、また是非御意見、御助言をお寄せいたゞきますようお願いいたします。最後になりましたが皆様の益々の御発展と御多幸をお祈りいたします。

日本大学桜薬会

臨時総会開かれる

事務局

昭和54年4月1日（日）12時より東京ヒルトンホテル京都ノ間に於いて、角田吉弘君（4期）司会のもとに臨時総会が開かれた。

開会の辞（角田吉弘君）会長挨拶（平 栄君2期）に続き、議長大林　温君（1期）、副議長牛込陛阜君（14期）、書記中野紘一君（9期）、同大河内一紀君（18期）が選出され、活発な討議が行なわれた。

経過報告及び会計報告

昭和43年前後に起った大学紛争を境に会活動は約10年の間停止に近い状態にあったが、その間薬学科創設20周年記念祝賀会を開催した他、井上周吉先生、黒柳惣十先生が定年により退職されたので、先生に感謝する会が開かれた。52年1月には卒業生名簿（21期生迄収載）が完成し、会員に配布された。又、45年には薬学部独立の嘆願書を大学本部に提出した。正会員総数は54年3月末日現在 4886名である。

42年度迄会費徴収を行っておりその資質は約70万円であるが、それ以後会費の徴収は行っていないため、工科校友会補助金と名簿発行による残金が現有資産であり、君島正彬君（5期）により監査報告が行なわれた。資産総額3,013,406円（内訳普通預金947,196円、定期預金2,000,000円、振替口座66,210円）

桜薬会会則改正点

旧　　法	改　　正　　点
第5条　正 会 員	1.　正 会 員　日本大学工学部薬学科及び 日本大学理工学部薬学科卒業生
学生会員…	2.　学生会員　…
特別会員	3.　特別会員　第1項を除く日本大学理工学部薬学科教職員並びに日本大学工学部薬学科、理工学部薬学科にかって在職したもの
準 会 員…	4.　準 会 員　日本大学工学部薬学科及び…
第6条　1.　副 会 長　　2名	1.　副 会 長　　3名
4.　……各期1名	4.　……各期2名……
第7条　1.　会長は…	1.　会長は理事の互選により選出する。
3.　……勤務する者から3名……	3.　……薬学科に勤務する者から5名……
新　設	4.　常任理事は各期理事の互選により各期1名選出し他に会長が学内理事及び理事中より若干名を指名する。
4.　監事は…	5.　監事は…
第9条　新　設	3.　会長、副会長及び常任理事は常任理事会を組織し本会の会務を執行する。
3.　理事は……	4.　理事は…
4.　監事は…	5.　監事は…
第10条　1.　通常総会は…	1.　通常総会は毎年一回会長がこれを招集する。
2.　…正会員100名以上…	2.　…正会員300名以上…
第14条　新　設	1.　常任理事会
1.　理事会	2.　理事会
2.　委員会	3.　委員会
第15条　新　設	3.　理事会の決議は出席理事の多数決による。
第20条　本会の会費は…	本会の会費は次の通りとする。 正 会 員　年額　2,000円 学生会員　無　料 特別会員　無　料 準 会 員　年額　2,000円
第21条　…年度は…	…年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終る。
附　則　…42年11月3日	…54年4月1日…

会則変更について

会員増加、組織の拡大に伴い、上掲の会則改正が行なわれた。主な改正点は副会長の増員、常任理事会の新設、臨時総会開催請求権の変更の他、会費の改正が行なわれた。この会費改正は本総会の最大関心事であったが、現在の経済状勢にかんがみ改正案が上程された。42年度迄に納入された終身会費は、2,000円でありこの利子で会の運営が出来なくなり（実収100～200円）このことが10年間もの会活動不活発の原因でもあること、更に経済状勢が不安定な昨今、利子による会の運営は今後考えられないことが報告された。納入ずみの会費を廃止すること

に反対意見も出されたが現状では、会の運営を活発にするためやもえず**終身会費制を改廃し、納入ずみの終身会費は桜薬会資産に寄附していただき、今後は終身会員も年会費を納入すること**に満場一致で可決された。

ひき続き予算案、役員改選も別掲の通り承認され、新会長に石田隆夫君（1期）を選出した。新会長挨拶では充実した桜薬会の熟成と薬学科の学部昇格に対して甚大なる後援を尽力すべく決意が述べられ盛会裡に総会を終了した。

桜薬会会則

昭和33年11月2日施　　行
昭和39年9月6日改正施行
昭和42年11月3日改正施行
昭和54年4月1日改正施行

第1章　総　　則

第1条　本会は日本大学工科校友会の薬学部会で桜薬会と称する。

第2条　本会は本部、事務局を日本大学理工学部薬学科内に置く。

2. 必要に応じ地区支部及び職域支部を置く事が出来る。

第3条　本会は会員相互の親睦及び向上を企画し日本大学理工学部薬学科の発展に寄与する事を目的とする。

2. 本会は日本大学工科校友会と密接に連絡し母校の発展に寄与する事を目的とする。

第4条　本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 会誌・名簿・その他印刷物の刊行
2. 講演・見学・研究会等の開催
3. その他必要な事項

第2章　会　　員

第5条　本会は次にあげる者を以って会員とする。

正 会 員　日本大学工学部薬学科及び日本大学理工学部薬学科卒業生。
学生会員　日本大学理工学部薬学科在学生。
特別会員　第1項を除く日本大学理工学部薬学科教職員並びに日本大学工学部薬学科、理工学部薬学科にかって在職したもの。
準 会 員　日本大学工学部薬学科及び日本大学理工学部薬学科に在籍したもので理事会で推せんしたもの。

第3章　役　　員

第6条　本会には次の役員を置く。

会　　長	1　名
副 会 長	3　名
理　　事	若干名
監　　事	3　名

2. 前項の役員の外理事会の推せんにより名誉会長・顧問を置く事ができる。
3. 工科校友会役員は理事の互選による。
4. 工科校友会代議員は理事の互選により各期2名選出する。

第7条　役員は正会員より次の各号によって推せんし総会の承認を得る。

1. 会長は理事の互選により選出する。
2. 副会長は理事中より会長が指名する。
3. 理事は各卒業年次毎に5名並びに日本大学理工学部薬学科に勤務する者から5名選出し会長が推せんする。
4. 常任理事は各期理事の互選により各期1名選出し他に会長が学内理事及び理事中より若干名を指名する。
5. 監事は総会において正会員が推せんす

る。但し理事は監事を兼任する事が出来ない。

第８条　役員の任期は２年とする。ただし重任を妨げない。

2. 役員は任期満了後も後任者の就任するまでその任務を行なう。

第９条　役員の職務内容は次の通りとする。

1. 会長は本会の会務を統括し、本会を代表する。
2. 副会長は会長を補佐し会長に事故ある時はその職務を代行する。
3. 会長、副会長及び常任理事は常任理事会を組織し本会の会務を執行する。
4. 理事は理事会を組職し本会の運営上の諸問題を審議し決定する。
5. 監事は本会の経理を監査し、その結果を総会で報告する。

第４章　総　　会

第10条　総会は通常と臨時の２つとする。

1. 通常総会は年一回、会長がこれを招集する。
2. 臨時総会は理事会の要請によって必要あると認めた時及び正会員300名以上の要求があった時、会長がこれを招集する。

第11条　総会には次の事項を付議する。

1. 事業報告並びに事業計画
2. 決算報告
3. 予 算 案
4. 監査報告
5. 役員の選出及び承認
6. 会則の変更
7. 理事会において必要と認めた事項
8. そ　の　他

第12条　総会の決議は出席正会員の多数決による。

第13条　総会の議事は議長がこれを運営する。

2. 正副議長各１名及び書記２名は出席正会員中より選出し、議事録は議長及び会長が署名し本会に保存する。

第５章　役　員　会

第14条　役員会は次の通りとする。

1. 常任理事会
2. 理 事 会
3. 委 員 会

第15条　理事会は会長及び理事によって構成し会長が招集する。

2. 理事会は総会に次ぐ議決機関であり次の事項を審議し、決定する。
   イ．総会に附議する事項。
   ロ．本会の事業運営に関する事項。
   ハ．総会の議決で委任された事項。
   ニ．その他会長が必要と認める事項。
3. 理事会の決議は出席理事の多数決による。

第16条　委員会は会長が必要と認めたとき設置することができる。

2. 委員会は原則として役員によって構成する。但し、理事会の承認を得てその委員を役員以外の正会員で構成する事が出来る。
3. 委員会の運営についてはその代表者がその都度会長に報告する。
4. 委員会の規定は別に定める。

第６章　事　務　局

第17条　第２条に規定する事務局は本会の運営に必要な事務を行なう。

第18条　本会の事務局長及び事務局員は会長が任命する。

第７章　会　　計

第19条　本会の経費は会費・事業から生じる収入寄付金及びその他の収入をあてる。

第20条　本会の会費は次の通りとする。

正 会 員	年額	2.000円
学生会員		無　料
特別会員		無　料
準 会 員	年額	2.000円

第21条　本会の会計年度は４月１日に始まり翌年３月31日に終る。

附　則　この会則は昭和54年４月１日から施行する。

昭和54年度　予　　算

収　入	8,200,000	
	会費収入	8,000,000
	工科校友会補助	100,000
	雑収入	100,000
支　出	8,200,000	
	印刷費	2,240,000
	通信費	1,360,000
	人件費	1,000,000
	事務費	500,000
	旅費	800,000
	会議費	600,000
	予備費	1,700,000

桜薬会の組織について

会長　石田隆夫

「桜薬会」は日本大学理工学部工科校友会の一部会として位置します。

近い将来「薬学科」が「薬学部」に昇格するやに聞いていますが、その場合は規約の改正を含めて「桜薬会」も独立ということになるでしょう。但し工科校友会の規約からみて、工学部及び理工学部卒業生は、工科校友会の会員でもあるという解釈も成り立ちます。しかしこの問題は、その時になって新めて討議されれば良いと思います。

現状では今申し上げた「工科校友会」に所属し、その恩典と規制を受けますが、「桜薬会」運営については、全く自由であるといえる様です。

そこで、今後の運営が円滑、且つ活発に行われる様、次の様に事務局並びに委員会が設置され、事務局員には学内校友に、又委員会委員には常任理事の方々に御願いすることになりました。

1）事務局（局長　山内　盛　4期）

桜薬会の運営に必要な庶務を担当します。従って桜薬会への質疑、要望、等すべて事務局に連絡すれば良く、多くの建設的な意見、支部或は会員の活躍状況、果ては求人求職に至る迄、何でも連絡して下さい。

事務局は日本大学理工学部薬学科内に置きます。

101　東京都千代田区神田駿河台1－8
日本大学理工学部薬学科内
TEL 03－293－3201

2）委員会

○総務委員会（委員長　高仲　正　2期）

会の運営、企画、会則の立案改廃に関する事項および各委員会の分掌に属さない事項を担当します。

○財務委員会（委員長　木下　肇　1期）

予算の編成ならびに決算に関する事項、財産目録の作成、及び会費の徴収に関する事項を担当します。

○事業委員会（委員長　大林　温　1期）

会員相互の親睦及び向上と、薬学科の発展に寄与するために、会誌・名簿その他印刷物の刊行、その他必要な事項を担当します。

会費納入についてお願い

財務委員会

昭和54年度総会に於いて会則の改正が認められ、終身会費はなくなり（総会記事参照）正会員会費が年額2,000円に決定されました。

桜薬会の運営を円滑に行なう為には、早急に会費を徴収しなければなりません。つきましては財務委員会から次の様に御協力下さる様お願い申し上げます。

1. 会費送金は振替用紙で御願いいたします。お近くの郵便局で納入して下さい。領収証は郵便局発行のものでかえさせていただきますが、納入者氏名は桜薬会会報に掲載します。

   口座番号　東京　2－50025
   加入者名　日本大学桜薬会

2. 出来ましたら5ケ年分（10,000円）をまとめて御送金下さるようお願い申し上げます。
3. 同期会、卒論教室同窓会など開催の際には、会費未納者の会費徴収をお願いすることもあります。幹事の方はご協力お願い申し上げます。

教室だより

薬化学教室

薬化学教室は当初理工学部2号館3階の231－A室（旧302号室）1室であつたが、その後拡張されて隣接の231－B室と共に現在2室を使用しています。なおガスクロマトグラフィー、およびUVスペクトルメーターなどを設置した小室も廊下を隔てたすぐ前に持っております。また習志野キャンパスにも1研究室があり、所属人員は駿河台に8人（内現在1人欠員）、習志野に2人、計10人の大世帯で教育研究に専心従事しています。

昭和50年に定年退職された黒柳教授は名誉教授となられ、現在もご健在で週1回金曜日にご講義のため研究室にお出でになり、われわれに有益な教示を賜っておられます。昭和54年3月には立山先生も定年退職されましたが同先生は桜和会薬学教育研究所を創設（事務所：東京都千代田区神田駿河台2－1－19アルベルゴお茶の水701号室）され薬剤師国家試験受験生の講習に専念されています。われわれは両先生の輝かしい業績を継承し、教授里見以下宮尾助教授、外山専任講師、香取専任講師および本橋副手の5名が駿河台校舎で、また長谷川（稔）教授と高畠副手の2名は習志野校舎（8311号室）で、それぞれ薬化学教室の益々の発展のため頑張っております。その他に研究生1名、院生副手2名も皆我々に協力して努力しております。以上が構成人員ですが一方毎年志望して来る卒研生は20名前後でみんな才能豊かな精鋭揃いでまた芸達者が多く、われわれが手綱を締めなければ実験よりもコンパの時間が多くなりかねません。宮尾師の学生の面倒見の良いことは定評があり、淑やかな外山師、学生指導の親切な香取師共によく学生から慕われています。研究熱心でよく精力的に仕事をやる本橋君（昭和51年卒）は一方で庖丁を持てば玄人はだしの腕前でコンパの時には立派なうまい活き造りを馳走してくれます。学究肌の長谷川師の下では高畠君（昭和52年卒）が業務に精励しています。

卒論生の男女比率は常に男性優勢で薬学では最も男臭い研究室で通っています。

研究活動も留学帰りの長谷川師、および香取師を交えて近年頓に活発となり、最近屢次にわたり薬学会や理工学部学術講演会で研究発表をし、また学会誌乃至薬学研究報告誌に研究論文の発表を続けております。現在の研究テーマは 1. 有機硫黄化合物の研究、2. マンニヒ反応、3. 複素環化合物の光化学反応および、4. スーパーオキシドによる核酸構成物質との反応性の検討などであり、殊に最後のものは東大薬学部広部教授と提携し生物活性を検討しながら合成および分解反応を行ない、わが薬化学教室としては新機軸を目指し頑張っております。

わが教室の卒研出身者は第1回生以来400余名をかぞえ、諸兄姉みなそれぞれ、職場における重要ポストで活発に活躍されており、あるいは主婦となり幸福な家庭を築いておられることはまことに喜ばしいことであります。どうかみなさまが寸暇を割いて教室を訪問され近況をお聞かせ願えれば幸甚です。

翻って長い間の念願である本学科の薬学部昇格問題も大学当局の好意ある配慮と、卒業生諸兄姉および薬学科教職員の強い要望により実現の趨勢が一段と増大して来ましたが、先立つものは何とやらで学内における予算面の手当てが具体化することが最喫緊事であろうと思っております。どうか桜薬会校友の皆様のご理解と絶大なご協力をよろしくお願い申し上げる次第であります。（里見記）

生化学教室

昭和45年4月16日、衛生化学教授平山清氏の御退職とともにそれ迄生化学を御担当の沢村良二教授が衛生化学を、多糖類化学を講義していた有吉歌子が生化学を担当することになりました。

それより早10年、漸く教室も基礎が固まり、仕事の方向づけも確立して参りました。当初、薬物学教室御出身の梅本準治氏（日大37年卒）が講師でございましたがペンシルバニア州立大学ハーシーメディカルセンターでの留学が二年となり51年9月に御退職、現在はマルホ株式会社の要職に就かれております。副手でいられた根岸映子氏（日大49年卒）は昨

秋、薬物学教室御出身の岡安孝明氏（日大48年卒）とおめでたく華燭の典を挙げられました。黒豆や白胡麻のα－ガラクトシダーゼについて熱心に研究を続けていました山上和夫氏（日大49年卒）は52年4月より防衛医科大学寄生虫学教室に御勤務でございます。

現在の教室員は生薬学教室より高橋周七（日大34年卒）が助教授として51年10月より実習を担当し、52年4月には東大工学部卒（46年）の小川眞理子が助手として就任しました。50年4月より糖類の構造決定にとりくんでいます小池勝也（日大50年卒）は教室での古参者として、なくてはならない存在となっております。大塚一記（日大54年卒）は給費生として、三井記念病院御勤務の長谷川敏子氏（明薬31年卒）は週一回お見えになり二年以来、熱心にお仕事にうちこんでいられます。

研究課題は動植物中の糖質の構造決定とその水解酵素で、54年8月末、札幌における日本薬学会第99年会には：

1. ジオウの葉の成分研究
1. タカアザミの根の糖質について
1. ヒメアカホシテントウのトレハラーゼの精製とその性質つゞいて54年11月の日大理工学部学術大会には
1. 生体関連物質のＬＥＴ効果について
1. 温泉原中の好熱菌よりα－およびβ－galactosidase の誘導

以上の表題で発表致しました。

もう春、3月もまぢかく、卒論生も社会へと羽搏いて参ります。就任以来の卒論生も163名を数えます。彼等は自分の方向を適格に選び、それぞれの分野で技術のみならずその誠実な人間性をもって実に立派にその職責を果されております。そしてそのような便りを耳に致します毎に教室員は一層、真剣に卒論生の指導にあたっております。

それにつけましても生化学教室として当教室以前の先輩諸氏と一堂に会する計画をたてゝおりますが多忙にかまけてその責を怠り真に申し訳なく存じおりますが、早急に実現致したく、その節には何卒、御協力のほどをお願い致す次第でございます。

（有吉　記）

放射化学教室

アメリカ便り

桜薬会会員の皆様には各方面で活躍され、その情報を聞くにつけ大変嬉しく存じますと共に内部に残っているもの（S. 38年卒）として薬学科の発展に少しでも寄与しなければと発奮させられます。

さて諸先生方の御好意により昭和54年9月1日から1年間の予定で、シカゴ大学に留学しております私のもとに、桜薬会学内幹事の1人の岡村先生（薬剤学研究室）から会報の中に「研究室だより」を掲載するので「放射化学研究室の現状と抱負・アメリカ便りも含めて」書くように御連絡いただきました。

しかし研究室に関する書類は日本に置いてきてしまい、細かいことは書けません。また、私の思い違いによる内容の誤りがありました折には御容赦いただくことに致しまして、すでに卒業されて10年以上経った方には馴染がないと思い、「放射化学研究室の生い立ち」も含めて書かせていただきます。

「放射化学」（科目の名称は年によって多少異なりますが）の講義はそれ以前は放射線医学総合研究所（放医研）から非常勤講師としてこられていた鈴木先生がされていましたが、昭和44年の夏ごろ急逝され、その後を私が補う形で入り、昭和45年度から卒論生が出ています。場所は二号館三階の道路側の廊下の突き当りで、昔ベランダだったところです。

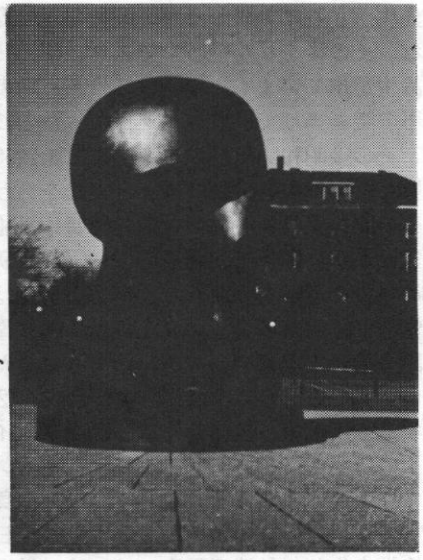
その後昭和54年度の卒業生まで総数58名の人が卒業し、薬学の各分野で着々と実績をあげております。その間、薬学科共同の放射性物質取扱施設（ＲＩ施設）がない関係で、講義の中に、放医研や国立衛試の施設の見学を入れたり、卒業実習では日本大学歯学部（駿河台校舎）のＲＩ施設や国立衛試のＲＩ施設を借りて実習や研究を行ってきました。その内容は(1) ^{3}Ｈを用いて標識化合物の合成、(2)薬物類に対する人工抗原、抗体の作成、(3)ラジオイムノアッセイの研究などです。

以上述べましたことから、今後の抱負としては薬学科の諸先生方の御援助をいただき1日も早くＲＩ施設を作り、私達の研究には勿論、学生にも卒業するまでに一度は放射性物質を扱わせ、薬剤師として

薬局方収載の放射性医薬品について一応の知識をより得やすくしなければと思っています。この点に関して会員の皆様の御協力をお願い申し上げます。

さてまだ少し紙面に余裕がありますのでアメリカの様子を少し書き加えたいと思います。私が留学しておりますシカゴ大学があるシカゴ市はイリノイ州に属し、五大湖の１つミシガン湖畔にあります。北部アメリカにある関係で夏は乾燥していて比較的すごしやすいようですが、冬は北海道ぐらいに気温が下がり、雪も多く活動が阻害されるようです。大学は1892年にJ. D. ロックフェラーが設立した私立大学で、日本で言う大学院大学にあたり、"先生の先生"を育成するのを目的に高度の教育をしているようです。もう一つの特長は付設してプロフェッショナルスクールがあり、これには医、法、神、図書の司書、福祉及び事務のコースがあり、この方面での専門家を育成しており、これを終了した人は大学院を終了した人より良い給料で各分野に就職するそうです。

私のいる研究室は医学部のワイラー小児病院（小児病院としてはかなり有名で、日本からも多くのドクターが来ています）棟内にあり、若いボスでエネルギッシュに行動しています。少し前まではモルヒネ抗体の作成を中心とした仕事をやっていましたがいまは脳内モルヒネ受容体蛋白の研究と、脳内コリントランスアセチラーゼ（chAc）の受容体の仕事を中心にやっており、私はchAc酵素抗体の作成を受け持っています。



大学として今まで多くの業績をあげ、多くのノーベル賞受賞者も出していますが、その１つとして、現在の核時代の幕明けになった原子炉を用いた自動制御により核エネルギーを取出すことにはじめて成功したエンリコ・フェルミの業績を称えた記念碑（写真）が私には印象的にうつりました。

紙面の関係でここまでにしますが、おわりに会員の皆様のさらに各方面での一層の御活躍をお祈り申し上げます。　（青木　記）

衛生化学

教室員一同変りなく張り切って教育および研究に従事しております。昭和45年度から衛生化学教室の教員構成がかわりました。少々古い事柄になりますが、その説明と現在までの経過を説明します。

平山　清先生ご退職後、科目担当が変更になりました。澤村良二先生は、生化学、微生物学の科目担当から衛生化学、公衆衛生学を担当されることになりました。微生物学は小山隆が担当することになり、教室も生化学教室から衛生化学教室に変更になりました。生化学は有吉歌子先生が担当されることになり、生化学教室を引継がれました。その当時の教室のスタッフは、澤村良二先生、小山隆と木村由美子、馬場厚子（昭43～48・３）、小西慧子（昭44～48・3）の諸嬢が勤務されていました。その後、東（馬場）菊池（小西）さんは退職され、のち今村敏子さん（昭45～46・３）、赤木順子さん（昭和46～48・３）、川畑利明さん（昭48～49・３）が勤務されておりました赤木さんは、伊藤姓にかわられ、現在は千葉大学附属病院臨床検査室に勤務されております。川畑利明さんも小泉姓にかわられ、千葉大学薬学部の衛生化学教室に勤務されるようになり、現在張り切って教育に研究に精進されています。昭和48年より吉田京子、木下美枝子、五十嵐静枝（昭49～51・３）、51年４月より立川（岡田）真理子さんが当教室に勤務されるようになりました。53年暮に吉田さんには、41年卒薬品分析学教室出身の、岩瀬廣さんとご結婚されることになり退職されました。後任には51年３月東北薬科大学を卒業され給費生として教室におりま

した平木映子さんが勤務しております。

昭和54年４月からは、薬学科および教室の充実をはかるため、昭和35年卒業の国立衛生試験所放射線化学部に勤務されておられた長谷川明氏を迎えて教室も充実いたしました。長谷川明助教授は鑑識化学を担当されております。

つぎに、衛生化学教室の卒業生数についてのべてみますと、昭和31年３月から45年３月までの卒業生（１～15回生）266名、その後、澤村先生にかわられ昭和46年３月以降現在まで（16～24回生）443名にのぼっております。卒業生の皆さんは、それぞれの分野で大いに活躍されております。

54年度の卒論生は26名という所帯でした。現在研究しているテーマは、塩素の生体および生体成分に対する影響に関する研究が主で殺菌剤として用いられる塩素について、生物成分であるアミノ酸や酵素タンパク質の活性におよぼす影響、また種々の物質と塩素との反応による物質の分解除去、他方では塩素による反応生物の有害性や環境汚染との関連についても検討しています。

つぎに生体膜の研究としてヒト赤血球の細胞膜中の糖タンパク質から特に血液型活性をもつ成分をとり出し免疫化学的性質を検討しています。また重金属の一つであり生体に必須の金属であるが、有害金属としてもはたらくセレンについて、その中毒発現機構について研究しています。

最後になりましたが、澤村先生を名誉会長としていただき、卒業生相互の親睦をはかっている“カッパ会”も毎年盛大に開催されております。昨年は特に澤村先生には、日本大学に奉職されて満25周年を迎えられました。そこで祝賀会を兼ねてカッパ会を９月23日湯島会館で開催いたしましたところ、先輩、後輩あわせて67名の出席をえました。当日は澤村先生秘蔵の二昔前のスライドなど映写して、“澤村先生にもあんな若かりし頃があったのですか”“あ”“あれが先輩ですか、若かったですね”と後輩にひやかされ感慨深げな先輩もいました。それぞれ意義ある１日を過ごしました。駆足で教室紹介をしましたが、神田方面にこられましたら、駿河台２号館に足をのばしてみて下さい。

（小山　記）

薬品製造学教室

桜薬会会員の皆様には御元気で御活躍のこととお慶び申し上げます。凡そ10年振りに桜薬会会報が発行されることになったようで、誠に喜ばしいことと思っております。教室だよりを書けとのことですが、薬品製造学教室はこの10年間先生方の出入りが特に烈しかったので、古い先輩方の為に日大紛争の起つた昭和43年度からの教室員の移動について報告することにいたします。先ず私のことで恐縮ですが、昭和44年10月薬品分析学の杉井教授が熊本大学薬学部に転出された時、薬学科教室主任黒柳教授から薬品分析学教室の面倒を見てくれとのお話がありました。私自身兼ね兼ね薬学科には化学系の教員が多いから減員しなくてはと考えておりましたので、補充せずにしのぐことに決心して薬品分析学教室に転出いたしました。その後暫らく経って、昭和50年３月に黒柳教授が定年退職され、４月から里見教授が薬化学教室を主宰されることになりましたが、外山先生を連れて行き度いとの御意向があって外山講師が一緒に薬化学教室へ移られることになりました。教室は長谷川先生一人丈残り、同時に薬化学教室立山助教授の立場を考えますと、定年迄薬品製造学教室に移られ教室を主宰される方が良いと我々は考え、無機薬品製造学担当の立山先生に教室をお願いすることにし、心良くお引受けいたゞきました。この様な事情で里見教授、外山講師と入れ替りに立山助教授が昭和50年４月から昭和54年３月迄の４年間教室を主

宰されました。この間私は昭和50年４月から２年間教室主任をしておりましたが、不足している教授の補充を科内で考えます時、長谷川稔助教授以外に該当者が見付からず、長谷川先生の御意向を確かめましたところ、昇格を希望され、また将来薬化学をやりたいとの御希望もありましたので、当面物理化学担当の教授として薬化学教室へ移っていたゞくことを条件に、52年４月教授に昇格されました。従って教室に１人残られた立山助教授の御意向もあり、薬化学教室の香取講師に出向の形で立山先生を手伝っていただきましたが、香取先生は昭和53年９月より１年間、研究のため東京大学広部教授の教室に留学されました。一方私が10年近くいた薬品分析学教室では桧沢助教授が学位をとられ、卒業生教職員としては初めて昭和54年４月教授に昇格されました。また私の行く前、井上、杉井、山本、桧沢先生と講師以上が４人いた分析教室は私が抜けますと山本、桧沢先生の２人に整理されることになります。これで私が分析に行った目的も達せられましたので、昨昭和54年３月立山先生が退職された機会に、私は再び薬品製造学教室に移らせていただきました。私は私なりに科全体の配分を考え勤務してまいりましたが、矢張り自分の教室のことも考えなくてはいけないと割り切り、立山先生の抜けられた分、思い切って外部から人材を入れることを決心し、塩野義製薬に勤務しておられた３回卒業の徳竹伯夫博士に当面助教授ということで来ていただきました。助手には道祖土勝彦君（当教室15回卒）に高畠亨君と交替で来ていたゞき、副手には新卒の松井留美子君に残っていただきましたが、昨年12月一身上の都合で退職され、本年１月より三宅宗晴君（当教室23回卒）が代りに勤務しておられます。以上のような経緯で、桐沢、徳竹、道祖土、三宅の４人が夫々心を新たにして教室の構成員になってから、そろそろ１年を経過することになります。徳竹先生は大変張り切っておられますが、私が理工学部の雑用掛りをしているせいもあってまだ成果があがるところ迄は至っておりません。

尚、助・副手の移動は次の通りです。（ ）内現姓。

外山美代子助手～昭46・３（昭46・４より専任講師）、陶山順子助手～昭45・12、福田（高橋）恭子昭43・４～44～48・３、内野（細田）庸子　昭44・４～48・３、梅津（加藤）康子助手　昭46・１～50・３、安田豊子　昭48・４～49・３、国分(保谷野)陽子　昭49・４～51・７、山崎（竹田）貴美子　昭50・４～51・12、渡辺雅夫　昭51・８～52・３、高畠　亨　昭52・４～54・３、(薬化学へ)、永沢美枝昭52・４～54・３、道祖土勝彦助手　昭54・４～（薬化学より）、松井留美子　昭54・４～54・12、三宅宗晴　昭55・１～、

また院生扱い雇として昭和46年度より家串稔、中村登、加藤裕、杉浦幸夫、渡辺雅夫、佐野晶子、平良寿次、林ひとみ、三宅宗晴の諸君が各１年ずつ勤務して下さいました。

割当の枚数がなくなりましたので、教室の現状については次回にお知らせいたします。（桐沢　記）

生薬学教室

研究室は大学紛争以前駿河台校舎３号館に設けられていたが、昭和42年に駿河台に建設された８号館に移転し、更に習志野校舎８号館に分室を置き、現在は滝戸教授、山内助教授を中心に教室員一同張り切って教育および研究に従事しております。尚滝戸先生は昨年10月より主任教授になられ、多忙の毎日です。高橋周七助教授は習志野校舎において薬用植物学の講義を担当されていましたが、52年４月より生化学教室助教授として移籍されました。以後薬用植物学の講義は農林水産省浅川林業試験林の室長である小林義雄先生が担当されています。

今年度の卒業研究生は27名（男子16名、女子11名）が配属になり，７月29日から８月１日の３泊４日（行車中泊）で伊吹山に植物採集旅行をしました。初日は１合目にて、ミツバ、クズの若葉等の採集した野草を天ぷらに揚げ舌鼓を打ちました。翌日は岐阜県側のドライブウェイの五合目よりやぶを分けながらの採集でしたが、幸いお天気に恵まれ全員元気に登る事ができ、「神農も伊吹山には仰天し」と言われるが、改めて薬用植物の豊富な事にびっくり致しました。最終日はここ数年恒例にしている岐阜県羽島

にあるエーザイ川島工園内の内藤記念くすり博物館へ見学に行き、国井敏信氏（17期、生化学教室）の出迎えを受けました。このくすり博物館は木村雄四郎先生が設立発起人の１人として創られたもので、先生が蒐集した物も展示されています。

10月11日には習志野校舎に於いて卒研対抗ソフトボール大会が行われ、２チーム出場しＡブロックに於ては優勝、Ｂブロックでは４位の成績でした。

就職状況は現在までに、杏林製薬、エーザイ、全薬工業、エスエス製薬、万有製薬、津村順天堂、山之内製薬、三共、吉富製薬、第一薬品工業、東大病院研修生等に内定しております。

最近研究室に整備された機械類には、島津二波長クロマトスキャナー、ローテーション・カウンターカレントクロマトグラフィー、冷水循環装置、水流ポンプ、高速液体クロマトグラフィーの各種機器が入り、機械設備も充実してきました。

54年度の研究活動を挙げますと、８月札幌で行われた日本薬学会99年会では「決明子の成分研究」を発表しました。11月に明薬で行われた日本生薬学会では「Cassia属植物中の成分分析」「Sennoside AおよびBの定量」と「センナの試作栽培研究」を発表しました。11月の日本大学理工学部学術講演会では「決明子の成分研究(2)」「銀柴胡の成分(2)」および「金銭草の成分について(2)」を発表しました。また今春東京で開かれる日本薬学会100年会では、４題の発表が予定されています。

薬用植物園は40年に津田沼校舎より習志野校舎に移転し、藤田早苗之助先生が管理されていましたが、

内藤記念くすり博物館前にて

48年に退職され後、遠藤豊氏が管理しております。52年には床面積136㎡の温室が完成し、センナ、インドジャボク等の熱帯薬用植物が栽培されております。また滝戸先生は日本植物園協会副会長を務められており、薬用植物園のモデル園としての評価を得ています。

53年３月２日に滝戸先生の奥様が急逝され、教室出身者にとっては飲み過ぎてお世話になったことなどが思い出され、残念でなりません。ご冥福をお祈り申し上げます。

生薬学教室員（昭和54年度）

▷教授　滝戸道夫▷助教授　山内　盛▷助手　北中進（17期生）、安川　憲　（18期生）▷副手　金児朋子（21期生）▷副手（院生扱）松浦　晃（21期生）、古坂直子（24期生）　（北中　記）

薬品分析化学教室

桃澤先生より今回桜薬会会報原稿のお話を聞き、我が文才のなきことも顧みず引き受けてしまった。そこで以前発行された特集号が手許にあったので、読み返してみた。42年の時の物でいわゆる全国的な大学紛争の前年にあたり、その頃までは各研究室にそれぞれ研究会があり、各分野にて研究活動も活発に行なわれていた。大学祭の折にはその結果が発表されてきた。現在は２、３の研究会のみが薬学科としては存続しているが。(私の記憶に間違いがなければ）理工学部としてのサークルは数えきれない程多数に及んでいる。

今年はマスコミでも盛んに「80年代」の言葉が氾濫している中で、本年頭にあたり主任教授よりわが薬学科はいよいよ薬学部として昇格への道へと進める段階になるとのお話があり、創設以来の私には感無量とともに、この上なき良き年の始まりであると感じた。この実現が１日も早いことを願いつゝ教室便りとのこと故、分析教室の現在までを記してみたいと思う。

杉井前教授が熊本大学に移られて、桐澤教授が分析教室に来られて早いもので約10年経つ。しかし54年度に薬品製造学の立山先生が定年退職され、桐澤

教授は元の薬品製造学教室に戻られた。分析教室は今や活躍どころの当薬学科出身の桧澤教授に引きつがれた。副手は最近女性の方は2年位で交替となり、若い人に変動が見られる。内倉助手は54年度は内地留学にて1ケ年研究に従事されたが、本年3月には帰学され私についで、桧澤教授とともに古い教室員になられる。

分析なる科目はもともと地味な基礎科目であるが、近来は急激に機器分析へと発達してきた。分析機器の進歩は分析の自動化、または機器化に直結し、その内容が急速に改良発展されてきた。幸にそれを専門にされる桧澤教授をいただき、私は従来の基礎である薬品分析化学を担当して現在に至っている。

この2,3年来卒論着手者が多く教室にも大体定められた予定数の学生が来られる状態が続いている。卒論生の中には時により機器分析を初めより希望して見えるものもあるが、実験室の具合とか、本人の希望などでなかなか思うにまかせない時もある。この卒論で各教室に入ることにより、何よりの交流が我々教師と学生との間に生ずると思う。ただ少し小さくまとまって片よるのではないかとの憂いなきにしもあらずとも考えられるが。私もせいいっぱいとけ込もうとしているが、何分アルコール類が一切だめで、この面からのおつき合いが出来なく苦慮している。勿論これのみが交流の元とは思わないが、

55年度には桧澤教授が海外留学に定まり、1年間我々一同にて留守をあづかる立場になった。たまたま薬親会の当番にもあたつた。私は53年の病気以来頓みに健康に自信を失ったが、内倉助手、百瀬、石井両副手の諸兄姉と共にしっかり教室を守り、教授に後顧の憂いなく充分な研究がなされよう頑張ってゆきたいと思う。また急速に改良発達してゆく機器分析、その他の分析法にもおくれを取らないよう、勉強しつゝ分析教室をよりよい教室へともりたてゝゆきたいと考えている。　（山本　記）

薬剤学教室

薬剤学教室が43年2号館に隣接の8号館へ移ってもう12年過ぎました。（研究室および製剤機械室は3階、調剤実習室は4階です。）

その間、1回生より調剤学を担当されていた不破先生は50年健康上の理由により退職され、現在は湧永薬品株式会社の顧問として、ご活躍されております。

46年4月より副手として勤務されていた仲由紀子さん（46年卒）は退職され、現在は日発病院薬局に勤務、また給費生扱い副手の方も44年より杉山信子さん（44年卒）（旧姓；榎本）、横山悦子さん（45年卒）、関修氏（47年卒）、阿部矩幸氏（47年卒）、季慶芳さん（49年卒）、山崎恵子さん（50年卒）、斉藤公子さん（51年卒）（旧性；細谷）、高畠君子さん（52年卒）、高瀬淳一氏（53年卒）とそれぞれ交代し、現在は各分野で活躍しておられます。

現在の教員室は猪瀬秀雄助教授、岡村信助教授、伴野和夫助手（49年卒）、給費生扱い副手には大沢道代さん（54年卒）そして後藤博子助手の5名で研究と学生の指導に当っております。

なお、当教室の研究テーマとしては、

(1) 外用剤中のホウ酸の生態におよぼす影響

(2) 医薬品の安定性に関する研究として、アスピリンおよびその誘導体の固体状態における分解機構について

を主体として研究に従事しております。

猪瀬先生は45年健康をそこなわれて以来クラス担任をやめておられましたが、再び51年より4年生の担任として主に就職のお世話をなさっておられます。おかげさまで今年も就職希望者は、ほとんど決定したようです。

猪瀬先生は、49年より住みなれた板橋から鎌倉へ引越されました。

住所；〒248　鎌倉市七里が浜東3丁目9番7号
電話；0467（31）3609

岡村先生は、49年1年間東大製剤学教室へ内地留学され、ひきつづきその研究にとりくんでおられます。また、学務委員、3年担任と多忙な毎日を過さ

れておられます。

当教室の機械器具類については毎年新しいものが購入され他校にないような学生実習用の製剤機械類も設備され、測定機器としてはガスクロマトグラフ、高速液体クロマトグラフ、ダブルビーム分光光度計、分光けい光光度計、セミミクロ天秤等もそろっております。

本年度の薬剤学教室の卒論生は25名で（4年生は総数258名です）男子11名、女子14名で相変らず女性に人気のある教室のようです。卒論生の主な就職先は次のようなところです。越谷市立病院薬局、東大附属病院分院薬局研修生、千葉市立病院薬局、国立第二病院薬局研修生、阪大附属病院薬局研修生、神戸大学附属病院薬局研修生、国立浜松医科大学附属病院薬局研修生、協和醗酵工業㈱富士工場、東京女子医大附属病院薬局、バイエル薬品㈱、東海大学望星薬局、

最後に桜実会（日大薬学科薬剤学教室出身者の会）の会員数も今年の卒業生を含めて575名になります。毎年1回卒論生を含めて桜実会を開き、お互いの親睦を計ることになっておりますが第6回桜実会を52年に開き、その後2年開かれておりませんので今年はぜひ幹事の方（7期生、8期生）に頑張って開いていただきたいと思います。当番幹事は2期ずつ順番にまわっておりますのでよろしくお願い致します。終りに卒業生各位の益々の御発展を祈念し、今後の薬学科への絶大なご支援をお願い致します。

（後藤　記）

薬物学教室

朝夕ニコライ堂の鐘の音を聞きながら、教育に研究にいそしんだ3号館3階の薬物学教室も、移転8年後新築の8号館に再移転した。新校舎の明るさや狭いながらもスペースの拡充と、歓びつゝ落着くやいなや、大学改革と立ち上った学生運動にやむなく研究室は閉ざされ、新校舎もみるまにガラスは壊され、風に舞うビラと、落書き壁と化してしまったことは昨日のことの様に思いおこされる。苦しかった2年余りの学園紛争も大学の改善を願う期待と決意を残して終りをつげ早や10年、学園は静けさを取戻し、日夜教育と研究に及ばずながら努力している。

1）教室員の動向

8号館への移転とともに2号館3階西側ベランダに動物室が設けられ、野口朝光君（当時、理工学部2部電気科2年）が学生職員として入室。昭和44年には守屋芳子さんが歯学部松戸歯科大学へ転任され、梅本準治（7期）、青木正忠（8期）(両君とも大阪大学大学院修了）がそれぞれ助手、研究生として入室。此の年新村助教授は一年間千葉大学医学部寄生虫学教室に内地留学した。翌45年梅本君は生化学教室、青木君は放射化学教室へ勤務がえとなり新卒の草間貞君（15期）が副手として入室、昭和50年に牧村さんは東大薬学部薬害作用学教室粕谷豊教授の下に内地留学、同年、防衛医科大学校産婦人科加藤宏一教授、牧村紀子助手は共同研究の為一年間入室された。此の年動物室の野口君は退職され、千葉経済高校の理科の教師として赴任。小林保君（法学部卒、当時理工学部2部電気科2年）が代って入室。昭和52年には長い間教室の為に尽力された新村宗敏助教授は懇望され千葉大学医学部寄生虫学教室助教授に栄転され、江口国子さん（20期、千葉大学大学院卒）が入室。翌35年動物室所属の小林君は卒業の為退職され現在本来の弁理士として活躍している。現在は半数以上の教室が動物室を使用する状態になったので、後任の高橋光枝さん（23期）が、初めて薬学科の正規の技術職員として採用されることになった。

現教室員は村越善衛教授、牧村瑞恵講師、草間貞、江口国子両助子の4名と、院生扱い給費生田中俊一君（24期）、研究生は木村陸子さん（6期、化研生薬勤務）、田村孝夫君（11期経営学教室卒、日本ロッシュ勤務）、弘中賢二君（24期）の他動物室所属高橋光枝さん（23期）で皆張切って研究にまた学生の指導に当っている。

当教室初代の小沢光先生は東北大学を退官され、現在富山医科薬科大学副学長として御活躍なされている。

当教室関連の生物試験法の講義は昭和35年来から担当された粕谷豊先生（現在東京大学薬学部薬理作用学教授）から昭和54年には福田英臣先生(東京大学

薬学部毒性薬理学教授）に代った。先生は御多忙の為今年でおやめになられ、牧村瑞恵講師が引継ぐことになった。生理学解剖学は渡辺俊男先生（横浜国立大学運動生理学教授、本年御退官）が担当、病理学は宇津木良夫先生（現在国立栄養研究所病理部）に代り、昭和45年より花岡清助先生（医学部病理学教室講師、明治薬科大学客員教授）が担当下さっている。

2）研究室の最近の仕事

(1) 駆虫薬の作用機序に関する研究

(2) モルヒネ依存性発現機構に関する研究

駆虫薬や寄生虫に関する研究は古く、小沢先生以来継続されている。人体に寄生虫が少なくなったとはいえ現在でもなお食物としての動植物、魚貝類にも多くの寄生虫が存在し、また開発途上国での必要性や畜産面の要請からも駆虫薬の開発や作用機序の解明には期待されるものがあろう。なお比較生化学・比較生理学・比較薬理学（種族特異性）の面からも興味ある問題があり、新村助教授は寄生虫の特異代謝に関する研究で医学部より学位を授与された。モルヒネ依存性発現機構に関する研究は、当初代謝異状の有無の検索をしていたが、中枢における実験は非常に複雑であることから近年モルモット腸管及びマウス輸精管等にも morphine あるいは endorphins, enkephalins 受容体の存在が証明されてきたのでこれら末梢臓器の神経筋標本をも用いて中枢との類似性、依存性、耐性の発現機構の解明に取り組んでいる。これらの成果については、薬学研究報告、寄生虫学雑誌に発表されている。

3）機械・器具等の設備について

8号館移転時に2号館3階に現在では当然の恒温恒湿の空調設備と自動洗浄装置のついた動物室が狭いながらできた。生化学的薬理研究に関連のある機械機器類がほぼ取揃えられたが、最近電気生理学的な機器も徐々に整備しつゝ、急激に長足の進歩を示している薬理学に対応する努力を続けている。唯、アイソトープ施設のない当薬学科においての実験は、他学部や他研究機関のお世話にならねばならないことは研究教育の大きな障害となっている。

（牧村　記）

香粧品化学教室

香粧品研究室の卒業生も既に400名の多きを数えるわけですが、実社会に出られた多くの卒業生は既に会社や病院等の職場で中堅となり、或はまた薬局経営を、女性にあっては家庭の主婦として各々その処を得て活躍されており、研究室の者として御同慶に感じておる次第です。

これら卒業生の在学時代を振返り、研究室の今昔を思い出すがまゝにしるしてみました。

薬学科創立後7年程の後、正確には昭和34年4月から香粧品研究室として、卒研生を採ることになりました。当時はまだ研究室として出来たばかりで、薬品を求めるのもまゝならず、実験は勿論、実験室さえ無い状態でした。石松先生の下で卒研指導を行う小生にとって、4期の卒研生8名とは意志の疎通をはかることが大切と考え学外でのお付合も結構多かったように思います。しかし、そんな為に今でも友人としてのお付合を願っておる次第です。

研究室は2号館235A室（現薬化GC室）で、石松先生と小生の机、それにダルマストーブが真中にあるだけの殺風景な部屋でした。

研究室にとり大世帯となったのは6期生24名が入室した時でした。しかも当時の猛者連が多く、斗酒なお辞せずのため旅行、コンパでの酒量、余興などは壮観の一語につきました。香粧品の工場見学に出かけたのもこの時が最も多く、今では貴重な体験となりました。

また、香粧品クラブの発足も6期の卒研生の協力によるところ大であったことを付記しておきます。

研究室としての体裁を整えたのは233B室（現放射化学研究室）が3階のベランダに増設され、そちらに移ってからで、8期の卒研生頃からはレオメータを購入し、学生実験もできるようになり、研究室としての学会発表も可能となりました。

研究室の最初の副手は10期の辻野英子（旧小林）さんと北村光孝君（現北村粧業）でした。後任として11期の丸山公恵（旧須藤）さんが残るに及んで、エマルジョンの安定性の分析機器として濁度計を設

置し研究を行いました。

昭和43年には理工８号館が完成し香粧品研究室も薬剤その他の研究室と共に現在の場所に移転し、やっと研究室らしい雰囲気になりました。

その後は14期の新井尚美（旧百口）さん、15期の岡民子（旧井上）さん等が新しい研究室に残り、学生の指導にあたっていたゞきました。

18期の三枝良安君（現、日大病院）が副手のとき石松先生の御希望もあって原子吸光分析を購入し、その後２号館４階のドラフト室の半分を改良、専用室として使える様になりました。また45年にはガスクロを購入し香料の研究も始めました。なおこの間研究室に残って奮闘してくれた、経営17期卒の高木友直君（現薬局自営）と19期卒の川村恵二君（町立病院）を忘れることが出来ません。

19期の会田恭子さん（現東光ドラックＫＫ）が副手として残った時、50年度理科助成金により待望の高速液クロを購入することが出来て、研究室にも一つの変革をもたらしました。同時に前記の原子吸光分析もフル回転で多忙さを極めて来ました。

会田さんの後輩で21期の落合かおるさん（現家事従事）が副手で、同期の唐沢佳孝君（現府中病院）と中島康明君（現薬局勤務）が研究生として残り、18期の斉藤好廣君が工化の大学院生として研究に従事した研究室は、大世帯でそれなりに卒研生のきめ細かな指導と研究発表ができて活況を呈しました。

53年からは落合さんの後任に前記斉藤君が副手として、また22期の青木千鶴子さん（現家事従事）が研究生としてそれぞれ研究室に残り、分析の試験、研究に、クロマトおよび原子吸光関係にそれぞれたずさわっていたゞきました。

本年度からは、青木さんの後任として24期の中堀克美さんがその任にあたって居ります。

こゝ数年は卒研生も20数名づゝの入室希望がありますが、諸先輩のお陰で私どもの期待に答えてくれ、就職に国家試験に頑張り、良好な成績を残して行けるようになりました。研究室としましても、大学本来の目的である研究と教育に専念する所存ですので変らぬ御叱正と御鞭撻をお願い申し上げる次第です。

（佐藤　記）

経営学教室

はじめに

日本大学理工学部の前身たる工学部に薬学科が創設されてから29年の歳月を経過し、25回目の卒業生を社会へ送り出す時を迎え、本学科発展の軌跡を顧りみるとき感慨ひとしおのものがあります。まず、薬科大学（部）の数において日大薬学科以降国立２、公立１、私立にいたっては16大学の新増設があり、さらに広島大学総合薬学科を除き国立大学はすべて学部へと昇格し、２ないし３学科編成による分科制へと展開して、その目的と手段については指摘される問題もあろうが、とにかく、今日の薬学教育機関の拡大発展はその設備施設の充実と相俟って正に百花瞭乱の感さえ覚える有様です。しかし、このことは医薬制度をはじめ、社会的、経済的背景を十分知ったうえでなければ論ぜられないことはいうまでもありません。たええば、凡ゆる物資が不足し、しかも生産設備の大半が烏有に帰した敗戦後の混乱期に際して他に魁けて復興が進められたのは医薬品産業であり、そのために化学工業を中心とした他業種からの参入が相次いだのもこの時期です。そして薬事法制の面では連合軍司令部の強い指導のもと徹底した民主主義的諸制度の刷新が行われ、薬事法も例外ではなかった時代でもあります。次いで朝鮮動乱はわが国産業界においては飛躍的発展への基礎ができあがった年であったといえます。製薬企業を席巻した技術革新の波はやがて大量生産、大量消費を促がし、商品構造、競争構造の変化を必然的なものとし、流通秩序の乱れはその極に達する事態となり、場安定諸施策に腐心せざるをえない結果を招くにいたった。これらの事象は医療制度と深くかゝわり合っており、医療用と一般用医薬品との生産額推移からもいえるところです。30年代末期から発生した薬害は被害続出に伴ない薬不信を招き、行政的是正措置に次いでようやく品質、有効性及び安全性を確保することを目的とする薬事法の改正が行われ、政省令の制定を待って昭和55年度から施行されることになりました。

経営学教室の創設

薬学科に経営学研究室が開設されたのは昭和31年4月1日です。第1回生諸君が卒業し、戦後の宇余曲折を経て成立した医薬分業法の施行日と奇しくも同じ日でした。筆者は、薬学科創設のことに参画した誼により昭和29年度から非常勤講師として当時の薬制経営論を担当し、昭和31年3月1日招かれて専任講師となり、その年4月から引続き現在にいたるまで薬業経営の研究とその指導にあたっているものです。しかし、薬学科設置後満4か年を経過した当時の組織は8研究室に分かれ、それぞれ講義及び実習を担当してはいたものの施設の面では、5室に同居を余儀なくされ狭隘を極め、現在からは想像すらできない状況であったので、図書閲覧室兼会議室の一隅に教室事務を兼ねた場所を設けたのが経営学教室のはじまりで当初5名の諸君の入室（後期7名）があったと記憶しています。もちろん、参考にする図書類は一冊も収蔵されておらず、筆者自身の持っている僅かばかりの文献のほか、すべて部外から蒐集しなければならない有様でした。

一方、薬学発展の必須の領域として基礎づけられた有機化学は天然物有機化学の分野において各種の物理化学的手法の導入により一段と拡大し、構造研究から合成研究へと転換され、薬学研究者等の研究もこれら領域に集中したためその他の薬学領域は十分には発達し得なかった時代であり、薬業経済与件に関する諸問題の研究が顧みられなかったことが今日さまざまの健康阻害を惹き起こした一因といえないでしょうか。

経営学教室の現状

さきに触れたとおり、この教室は薬業に関する基本的な問題のほか、当面する課題の在りままの姿を正確に把え、その動向を探索し薬業の健全な発展に寄与することを目的に次のテーマで研究しています。

(イ) 医薬品の生産動向と貿易の実状
(ロ) 医療機関における医薬品消費量調査
(ハ) 医療費と薬価基準（医療機関局別購入薬価の実状）
(ニ) 薬局実態調査からみた実状と業務上の改善策
(ホ) 流通段階における医薬品管理　（中村　記）

立山弥七先生退職記念パーティー

分林孝夫

昨年のことになりましたが、昭和54年4月1日、待望の桜薬会総会が、東京ヒルトンホテルで開催されました。その折に、薬学科で永年、御教鞭をとられ定年をむかえられた、立山先生に〝感謝する会〟が、薬学科教職員と桜薬会の共催で開かれました。

立山先生御夫妻をはじめ、現旧教職員の先生方、多数の桜薬会々員が出席され、盛大におこなわれました。総勢、235名の出席がありました。会場はたいへん華やかで、又、和やかでした。そのような雰囲気の中で、諸先生方からの御祝詞、卒業生から数多くの感謝の言葉や、御礼の言葉が述べられました。更に、桜薬会から立山先生の永年の御功労に対し、記念品を贈呈し、我々の感謝の意を表しました。

立山先生から御挨拶があり、先生の御喜びや各位に対する御礼の言葉が述べられました。

引続いてパーティーが催されましたが、あちらにも、こちらにもなつかしい笑顔、そして学生時代を想い出させる声、それらがいつの間にか一つのサークルとなり、その輪は自然とふくらんで行きました。そのような輪は広い会場のあちこちにできて時間の経過を忘れさせてしまいました。

立山先生もさぞかし御喜びであったと御推察致しております。

後日、立山先生より改めて書面にて桜薬会に対し丁重なる御挨拶と金一封を頂きました。幹事一同、大変恐縮してしまいましたが、先生の御気持ちとして有難く頂くこととし、桜薬会の今後の発展に有意

義に使わせて頂くことにしました。又、先生の御挨拶として一句頂きましたので御招介いたします。

ヒルトンの丘　定年の桜かな

立山　弥七

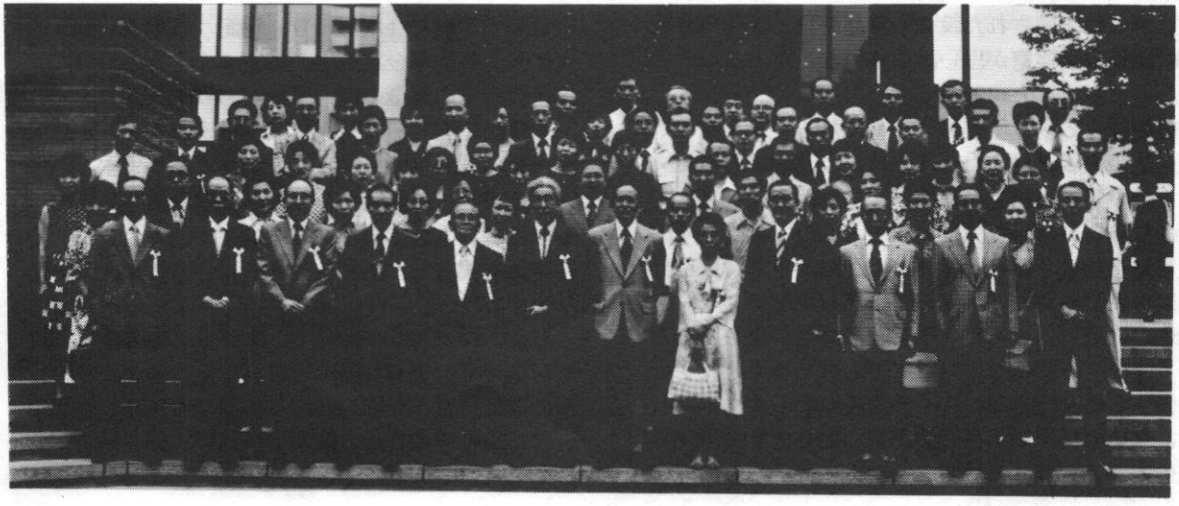
立山先生御夫妻の今後の御健康を御祈り申し上げると共に、本会が教職員諸先生方並びに桜薬会諸兄姉の御協力により非常に盛会であったことを主催者一同感謝申し上げます。又、総会が軌道にのり、毎年皆様方と再会ができますよう、期待すると同時に各位の御協力を切にお願いします。

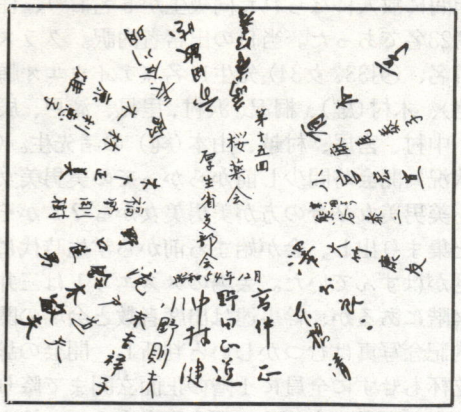
（薬品製造学教室昭和31年卒）

卒業20周年記念クラス会　　四期生

花の34年生を自称する我ら4期生も、月日のたつのは早いもので、学窓を去ってから20年になってしまった。そこでこれを記念して当時の先生方をお呼びして旧交を温めようではないかということになり、下記の通りクラス会を開催しました。日時、昭和54年7月8日、午後1時～4時、会場、新宿三井ビル内レストラン〝メヌエット〟会費、￥10,000。4期生は卒業当時の人数が175名であり、住所録を頼りにクラス会の通知を出したところ、返信が147名あり、そのうち出席67名、欠席80名であった。なおこの20年間に故人になられた同級生が5名おり、住所不明者23名であった。当日の出席者内訳。クラスメート67名、（男33、女34）先生11名（アイウエオ順、敬称略）、木村（雄）、桐沢、沢村、里見、滝戸、辰野、高村、中村、宮尾、村越、山本（純）の諸先生。（当日の状況）開会時間少し前からかっての美男美女、（今も美男美女？今の方が美男美女かな？）がぞくぞくと集まり出し、会が始まる前から学生時代に戻って話がはずんでいた。会場のメヌエットは三井ビルの54階にあるが、幹事達は出席者数と会場の関係で室内記念写真はむづかしいと判断し、開会の辞直後に乾杯もせずに全員に1階の正面玄関まで降りていただき、石段のところで記念写真とシャレ込んだ。頭をなでつけたり、顔のシワをのばしたりして撮ったのがこの写真である。（学生時代に胸をときめかしたお相手は見つかりましたか）撮影後再び54階の会場に戻り、我が名物男市原君が同級生を代表して挨拶をした。流石は名物男、他の人にはない持味を出した挨拶であった。先生方の紹介、乾杯と続き、その後は飲めや食べろやしゃべれやという盛会のうちに再会を約して20周年記念の式典はメデタク幕を閉じた。（陰の声）何ていったって4期生は名物男、名物女がいて面白いよなあ、また来ようっと。

（H・S生）





酒亭じゅらく（新宿）にて

「寄　書」

親子二代

木下　肇

昭和27年薬学科新設の年に第一回生として日大薬学科の歴史の一歩を踏み始めた私にとって、現在息子がその列に連って歩いていると云うことは最大の喜こびと誇りに感じています。先日同窓会の用事で大学を訪れた際久しぶりに実験室に入りました。日常生活に於いては年々便利な物が出現し自然の流れの中でそれを利用して気付かないでいても、20数年ぶりでその完備された設備や備品を見て我々の時代の殺風景な実験室が思い浮び格段な差があることに感心して来ました。

終戦による物資不足もようやく落ちつきを見せ始め企業の発展が見えた時代とは云え我が日大に於いても新設学科の備品の完備は出来なかったと見えて一通りの器具は自費で買い求めたものです。2号館の増築に始まり年々教室数が増加して来た時は自分の家が新築された如く喜こびを感じたものです。自分達の成績に依って日大薬学科の評判が決定すると思うと先生方に叱咤されるまでもなく努力したせいか先生との交流も深くよく議論をかわしたものでした。この様に思い出多い我が家の如き大学に当時の先生方が大勢残っていらっしやるのだから親の立場から云えば息子もその先生方に近づき、もっと知識の吸収をしてもらいたいと望んでいるのですが、親と比較されるのが気になるのか、あまり期待通りの交流がないのが残念に思われます。同じ学業を修めている為に息子の勉強不足に依る成績の度合が察しがつくのは悲劇ですが、反面、息子の立場から云えば、家に居ても、学校に於いても自由を束縛されている様に思っているのではないでしょうか。

（薬品製造学教室昭和31年卒）

「伝言板」

石松先生をかこむ会

薬学科創設以来、私達卒業生一同が御指導いただきました石松新太郎先生は本年4月をもちまして日本大学を定年退職されました。桜薬会では先生の御希望により、これまでの形式とは別に、先生が教鞭を取られた大学予科同窓会、高等工学校冶金科同窓会と合同で「石松先生をかこむ会」を開くことになりました、後刻　世話人会より御案内を送付致しますが、「先生に感謝する会」ですので、多数の御出席を御願い致します。　（事務局）

日本大学創立90周年記念事業募金について

日本大学校友会本部より、別記「日本大学創立90周年記念事業募金趣意書」に基づく募金について、桜薬会にその募金の協力要請がありました。

80年代を迎える新時代に我が母校たるオール日大の一層の飛躍は誠に喜ばしいことであります。

もとより、桜薬会としても、その事業への協力はおしまないものであり、とりあえず、本会誌にその趣意書を掲載し、校友各位にお知らせ致す次第であります。

なお、校友各位において、本募金に応募される方で記念行事、事業計画の内容、また、募金要領や免税の取扱いなど詳細をお知りになりたい方、寄付申込書を御希望の方は、桜薬会事務局に御連絡下されば御送付申しあげます。

日本大学90周年記念事業募金趣意書

日本大学は、来る昭和54年10月４日をもって創立90周年を迎えることとなりました。

明治22年10月４日、時の司法大臣山田顕義伯が日本文化の高揚を理想として日本法律学校を創立したのに始まり、大正９年４月には大学令による大学となり、爾来激動する社会の潮流の中で終始創立者の建学の趣意を体して発展を続け、今日では人文科学・社会科学・自然科学にわたる12の学部、13の大学院研究科を擁する一大総合大学として、確固たる教学の殿堂を築き上げております。

今日に至るまでの大学の歴史は、まことに筆舌に尽くしがたいものがありますが、建学の精神である「日本精神にもとづき道統をたっとび憲章にしたがい、自主創造の気風をやしない文化の進展をはかり、世界の平和と人類の福祉に寄与する」という旗標の下に，とりわけ戦後の混迷の中にあってもあらゆる艱難を克服し着実に前進を続けてまいりました。

この長い道程を経て、いま本大学は人生に譬えればまさに卒寿に当たる記念すべき、また慶祝すべき時を迎えることとなったのであります。しかしながら、近時私立大学が当面する四囲の情勢は、必ずしも容易なものではありません。

高等教育機関としての大学に対する国民的期待と高まりは、大学の大衆化現象ともなり、私立大学が担う高等教育における役割の増大とともに、その社会的使命が強く要請されております。

この私立大学に対する社会的位置づけの変化は、国庫助成の増大とともに私立大学のあり方についての厳しい眼となっております。

この中にあって私立大学が存立するためには、独自の存在意義をもつことが必要であります。

本大学もまたその建学の精神を高揚し、とりわけ我が国最大の総合大学としての特性と機能とをじゅうぶんに発揮し、特色ある教育研究を実施して社会の期待にこたえることがなされなければなりません。

しかし、私立大学がその理想を実現するためには、なによりもまず存立の基盤を整備、確立する必要のあることも多言を要しないところであります。

このような状況の中で、創立90周年を迎える本大学は、これを契機として本大学の未来への展望を開くべく別紙の記念事業を計画した次第であります。

この実現に当たっては、本大学はもとより全力を尽くし教職員もまた協力一致して事に当たる所存でありますが、これまでご昵懇を賜っている関係各位のご協力を得ずしては、事の成りがたい実情にあります。なにとぞ前記の趣旨をご理解いただき、格別のご協力ご援助を賜りますよう切にお願い申し上げる次第でございます。　以　上

日本大学総長・理事長　鈴木　勝

日本大学90周年記念事業協賛会会長・
衆議員議員　河本　敏夫

日本大学90周年記念事業募金委員会委員長・
衆議員議員　江崎　真澄

桜薬会会報にご投稿を！

会報は皆様の交流の広場を目ざしています。貴重なご経験やご意見など、また交信、質疑なども含めて「掲示板」としてもご利用下さい。原稿締切は７月中旬。◦原稿用紙400字詰使用。◦住所・氏名・卒業年度、勤務先，近況を明記して下さい。

送付先：千代田区神田駿河台１－８
日本大学理工学部薬学科内
日本大学　桜薬会

求人・求職がありましたらご一報を！

桜薬会事務局に就職案内の窓口を設けておりますので、求人・求職がありましたら事務局までご連絡下さい。電話でも結構ですが、なるべく書面でお願いします。

桜薬会役員名簿

（昭和54年４月～昭和56年３月）＜順不同＞

名誉会長	滝戸 道夫	（主任教授）	副会長	高仲 正	（２期）
会　長	石田 隆夫	（１期）	〃	中村 健	（３期）
			〃	山内 盛	（学内）

昭和31年卒	（理事）	石田 隆夫※	木下 肇※	大林 温※	新村 宗敏	分林 孝夫
昭和32年卒	（〃）	高仲 正※	鈴木 康雄※	鶴田 実	鈴木 英夫	池田 重勝
昭和33年卒	（〃）	中村 健※	中村 勝義※	大庭 一郎	毛利 正	雑賀 昭助
昭和34年卒	（〃）	笹野 英雄※	角田 吉弘	猪股 三男	島峯 望彦	木村 清
昭和35年卒	（〃）	君島 正彬※	斉藤 隆	山本 忠宏	須田 明朗	奥窪 伸之
昭和36年卒	（〃）	前田 敏晴※	松島 章浩	金西 信次	小林 一雄	三股 輝夫
昭和37年卒	（〃）	藤原 充雄※	小山 征治	安藤 修一	矢崎 和則	今井 康雄
昭和38年卒	（〃）	伊藤 治憲※	畑中 耕一	小林 好通	河南 雅章	石川 将一
昭和39年卒	（〃）	中野 紘一※	中村 有宏	小松 康宏	渡辺 和子	勝木 康隆
昭和40年卒	（〃）	坂田 英明※	太田 健三	杉谷 英雄	滝下 満之	横井 幹枝
昭和41年卒	（〃）	鈴木 鎮世※	島村 忠昌	田辺 義雄	稲垣 英雄	松本 好正
昭和42年卒	（〃）	鈴木 長生※	荒井 正雄	須藤 健一	熊高 恒雄	島村 勝彦
昭和43年卒	（〃）	高橋 繁治※	小林 繁	西尾 公一	上野 直毅	松田 信行
昭和44年卒	（〃）	岸田 邦雄※	牛込 陛阜	西村 友則	小川 仁志	武田 文男
昭和45年卒	（〃）	森 孝之※	本吉 義博	吉川 和基	金高 成樹	藤井 裕一
昭和46年卒	（〃）	藤田 正雄※	鈴木 至	肥田 興造	奥村 恭久	中村 勝己
昭和47年卒	（〃）	高木 友直※	吉田 守	久保 秀一	向山 孝史	国井 敏信
昭和48年卒	（〃）	大河内一紀※	柴崎 文雄	大川 成司	樺島順一郎	三山 義博
昭和49年卒	（〃）	坪川 博則※	松本 徹	芹沢 典裕	山上 和夫	日向 一正
昭和50年卒	（〃）	鮎沢 健次※	佐野 幸恵	長井 邦男	浜中 敏雄	古江 輝紀
昭和51年卒	（〃）	吉川 勝※	豊田 隆	坂田 正樹	佐々木みどり	白野 寛子
昭和52年卒	（〃）	本馬 康弘※	苅部 博哲	前田 尚彦	山本 晃	管野 圭介
昭和53年卒	（〃）	葛岡 康広※	熊井 俊夫	吉野 達規	西 利和	河相 行宏
昭和54年卒	（〃）	石塚 善久※	長瀬 克美	林 利恵子	藤田 進	山口 明
学　内	（〃）	山内 盛※	椛沢 洋三※	岡村 信※	小山 隆※	道祖土勝彦※
監　事		志田 厚生	高沢 克昌	波間美佐子		

※常任理事

編集後記── 昭和41年２巻２号以後、久しく冬眠をかこつておりましたが、1980年代への飛躍を目ざして「桜薬会会報」を発刊することができました。ご寄稿下さいました各教室の先生方，同窓の皆様のご協力に深く感謝いたします。

編集委員── 大林温(1)、岡村信（学内）(1)、笹野英雄(4)、藤原充雄(7)、坂田英明(10)、高橋繁治(13)、藤田正雄(16)、坪川博則(19)、本馬康弘(22)、

昭和55年５月10日発行

編集・発行　日本大学桜薬会事業委員会

発行所　日本大学桜薬会

〒101　東京都千代田区神田駿河台1−8

日本大学理工学部薬学科内、事務局　山内盛

電話・東京　293−3201

振替・東京　2−50025

印刷所　光星印刷社